

令和元年6月12日現在

機関番号：34206

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2016～2018

課題番号：16K01637

研究課題名（和文）発達過程における原風景やスポーツ原体験の連続性に関する検討

研究課題名（英文）A study on continuity of formative images and proto-experiences in sports in developmental process

研究代表者

奥田 愛子（Okuda, Aiko）

びわこ学院大学・教育福祉学部・教授

研究者番号：70556000

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、アスリートの特徴や幼少期の経験（原風景やスポーツ原体験）と、その後の競技への態度や意欲とのつながりについて検討を行った。

質問紙調査ならびにトップアスリートや一卵性双生児アスリートへの個別面接調査の結果、彼らが語る原風景やスポーツ原体験の内容（取り組み方）は、彼らの競技に対する考え方（態度）に影響していた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の成果から、原風景やスポーツ原体験といった幼少期の体験記憶の連続性が、その後の身体活動（スポーツ活動）の価値観や態度形成に影響を及ぼすことが考えられた。つまり、本研究の成果は、子ども時代の多様な体験がどのような連続性をもって自己に内包されていくべきか、あるいは、望ましい体験のあり方そのものについて示唆を与え、安易な「体験重視」の考え方にも注意喚起を促したものと考えられる。さらに、心理的問題を抱えたアスリートの心理臨床面接における「語り直し」の治療的意味を明らかにすることへもつながっていくものと考えられる。

研究成果の概要（英文）：In this study, we examined the relationship between the characteristics of athletes and their experiences during childhood (original landscape and original sports experiences) and their attitudes and motivations for the competition.

As a result of questionnaire surveys and individual interviews with top athletes and identical twin athletes, the contents of the original landscape and sports experience they talked about (the way of working) influenced the attitude (attitudes) to their competition.

研究分野：スポーツ心理学

キーワード：原風景 スポーツ原体験 アスリート 連続性

## 1. 研究開始当初の背景

### 1) 自伝的記憶について

人生早期の運動・スポーツ経験がその後に及ぼす影響については、しばしば言われている事であるが、それを確かめた実証的研究は少ないと言わざるを得ない。このような中、本研究者はスポーツ原体験を「スポーツ参加に関連する全ての事象における子ども時代の最も印象的で、かつ重要な意味合いを有すると個人が判断する体験」(奥田 2010) また、原風景は「成人してから心の中に深く刻み込まれ、人生に影響を与え続ける幼少期の風景であり、それは現在を生きる自己との相互作用を通して心のなかに創造された風景」(Nakagomi, et. al. 2011) と定義し、これまでアスリートの「原風景」や「スポーツ原体験」といった自伝的記憶を手がかりに、彼らのその特徴や幼少期の経験とその後の競技への態度や意欲との繋がりについて検討を行ってきた(奥田・中込 2013; 奥田・中込・鈴木 2015)。そこでは、アスリートの原風景にはすでに多くが“身体活動”の要素を含んでいること、そして、子ども時代からのスポーツ活動にまつわるさまざまな体験の連続性についての自覚が、各々の発達過程での競技継続の支えや競技へのコミットメントの水準に影響を及ぼしていることを明らかにしてきた。このように自伝的記憶を鍵概念とすることには、発達過程における競技活動の推進力(動機づけ)の説明や予測において、従来の心理学的構成概念(有能感、達成動機、効力感、他)に基づくのではなく、生育史でのエピソードを手がかりとした検討の方が、体験レベルでの理解により近づき、さらには、より積極的なスポーツライフを促すことが望ましい者たちにとって、行動変容を意図した介入への足掛かりを得るものと考えからである。

### 2) 自伝的記憶の個別事例について

上記の研究を踏まえ、身体活動に関する自伝的記憶についてより詳細に検討するために、これまでオリンピック選手や一卵性双生児アスリート等を対象とした個別調査にも着手している。そこでは、子ども時代の類似するスポーツ体験あるいは生育環境であっても、自伝的記憶は各個人で異なることがあり、競技力向上や実力発揮(現実適応)の様式および内的成熟(個性化)の過程といった、その後のスポーツ活動における意味づけも異なっていることを報告した(Okuda & Nakagomi 2015)。また、トップアスリートの著した自伝本の分析では、子ども時代の遊びを中心とした自伝的記憶が、成人してからの競技活動へのコミットメントの様式と重なる語りが多く認められた(奥田・中込・鈴木 2015)。

### 3) 新たな課題

このように、本研究者はスポーツ原体験や原風景といった自伝的記憶を手がかりに、長じた後のスポーツ事象の体験様式との関係について間接的に明らかにしてきた。しかしながら、これらの自伝的記憶を軸とした研究の目指すところは、各個人にとって選択的に想起された記憶が、その発達過程においてどのような連続性を持ちうるのかを検討することがさらなる重要な課題となってくる。そのためには、各個人のライフストーリーをなす物語的な記憶の形成過程に関わる詳細な情報収集がなされ、そこで得られた資料の分析・検討が新たな課題となる。

また研究目的に記した「スポーツライフ」は、これまでの競技スポーツだけでなくレクリエーションや健康促進を目的とした身体活動との関わり方へと研究対象の拡大を意図した。後年の特徴的なスポーツライフ(例えば、継続的な運動実施者、運動不振者、運動に対する否定的な態度形成者、他)にある者の自伝的記憶の特徴ならびに後年のスポーツライフとのつながりを明らかにすることによって、今日健康運動心理学の重要な課題となっている「運動行動変容」へのナラティブアプローチ(語り直し)の可能性や有効性を確かめるための第一歩を踏み出すことも課題に加えた。

## 2. 研究の目的

本研究では、これまで研究対象としてきたアスリートの事例をさらに積み重ね、ライフストーリーの形成過程における自伝的記憶の連続性について、ナラティブアプローチ(語り直し、新たな物語生成)を用いて明らかにした。さらに、研究対象を青年期年代にある運動不振者や成人期以後の特徴的なスポーツライフにある者へ拡大をはかり、これまでと同様に、調査時点での運動との関わり方への自伝的記憶の連続性を明らかにする。

## 3. 研究の方法

### 1) 個別面接調査

大学生あるいは実業団所属のアスリートとして活躍したアスリート、高校生アスリート、そして運動部に所属しない高校生等を対象者とした。アスリートの競技経験年数は11年~20年であり、双生児アスリートにおいては、彼らが一卵性双生児であるかどうかを大木ら(1989)の問診票にて確認している。対象者には調査に関する説明そして承諾を得ると同時に、自伝的記憶(原風景およびスポーツ原体験)について、自由記述形式の質問紙への記入を求め、対象者に対してその後の面接への方向づけをはかった。なお、事前に質問紙で回答された自伝的記憶と後年の競技

活動とのつながりについては、文章化による限界があることから、調査面接においては、彼らの自伝的記憶の中でも特に原風景(早期記憶)やスポーツ原体験について、記述内容を手がかりに詳細な聴き取りを行った。そのほか、双生児アスリートについては、親やきょうだいなど重要な他者の影響および進路決定時における双生児間の関係や双方にとっての存在意義などについて情報収集をはかった。調査面接は60分～90分程度、個別で行い、各対象者からの了承を得たうえで面接内容をICレコーダーに記録した。

## 2) 集団による質問紙調査

A県内の高校生271名(男性137名、女性134名、平均年齢16.2歳)。いずれも文化系あるいはスポーツ系の部活動を行っている者を対象に集団法による質問紙調査を実施した。なお、調査は所属高校長の許可および当該高校生の了承を得たうえで、ホームルームの時間や部活動時に実施された。なお、調査内容については、岡沢ら(1996)の運動有能感の調査票および自伝的記憶に関する以下の質問(～)に対して、自由記述形式で回答を求めた。

原風景の内容：幼い頃の「風景」「景色」「情景」等で思い出す内容を1つ。

原風景の位置づけ：原風景にともなう「感情」や現在への「影響」、そして自分にとっての原風景の「意味」。

早期体験：幼い頃の「遊び」や「運動」での印象深い記憶を1つ。

スポーツ原体験：これまでのスポーツ経験の中で印象深い記憶を1つ。

印象深いスポーツ経験の現在への影響：印象深く残っている早期のスポーツ経験と今の自分への影響(関係)。

なお、これら自由記述による回答は、評価観点を設定しコード化をはかり、数量的な分析・検討を行った。評価観点の設定ならびにその観点の客観性については、先の研究報告(Nakagomi, et. al. 2011)に示した通り、予備調査での回答傾向をもとに、暫定的な評価観点を設定し、本調査対象者の資料から無作為に20名分を抽出し、本研究から2名が独立して評価した。その結果、両名の評価得点に2点以上の差が生じた対象者の評価観点について協議した後、再度、評価観点の共通理解および一部の評価観点の加筆修正を行った。その上で、新たに抽出した20名分の評価を行い、研究者間の評価の一致率を高めていった。このような手続きを踏まえることで評価観点の客観性や信頼性を高めていった。本研究の分析では、第一研究者が中心となって評価を行い、評価困難や評価への確証が低い資料については、第二研究者との間で討議がなされた。

## 4. 研究成果

### 1) 個別面接調査

自由記述および個別面接調査で語られた自伝的記憶の内容を分析した結果、彼らの原風景はいずれも運動要素を多く含む力動性の高い内容であった。そして、原風景の今への影響については、表現の仕方には個人差が認められるが、多くが情緒的側面との関わりに言及し、それらは中込(2004)の主張する競技者心性として求められるパーソナリティへと通ずる特徴であった。このことから、幼少期の体験は内在化され、アスリートとして活躍する推進力となっていくことが考えられた。次に、スポーツ原体験では、おおくが後年の競技活動との重なりがみられ、このうち成功体験および失敗体験の想起がみられた。つまり、当時の情動体験は、内的体験としてその後の競技への原動力や推進力となっていくことが想像された。さらに、双生児アスリートに関しては、それぞれの自伝的記憶の多くに互いの存在が認められたことから、きょうだい間で体験を共有していることが考えられた。早期の体験ないしは記憶事象が内在化し、後年の高度な競技活動へと繋がっていく(自己展開していく)過程で、双方の存在の大きいこと、および競技継続の過程において、双生児きょうだい特有の双方の存在が、早期の体験と後年の有り様との結びつきを強めたものと考えられた。また、双生児きょうだい間ではお互いが鏡となって刺激しあう、相補的な関係となっていることが考えられ、きょうだい間での体験をどのように意味づけるか

表1. 自伝的記憶の内容 (3事例のみ掲載)

	原風景	原風景の今への影響	スポーツ原体験	競技継続への親の関わり	進路選択(高卒時)	きょうだい関係	進路選択(大卒時)	競技継続
A1	家族でのキャンプや山登り(5歳～小学生)	体を動かすのが好き。遠征、挑戦を思い切ってできること。エネルギーとなっている。	小学校の時の駅伝大会で優勝したことがあった。	練習に父親がついてきてくれた。	2人で一緒に進学したことを、大学の監督に伝えた。	いつも一緒にいることが心強い。	2人で意見が異なることや、対立することはなかった。	引退も一痛かもしれない。と、あえず4年はやりたい。
A2	キャンプや公園遊び(5歳)	体を動かすことやアクティビティに行動すること。安らぎやエネルギーとなっている。	小学校の時の駅伝大会で優勝した。多分これがなかったら、今の自分はないと思う。	練習のたのめ、いつも車で送ってくれた。		1人より2人の方が頑張れる。心強い存在	2人一緒に実業団から誘われた。	あと5-6年は一緒に続けたい。
B1	近所に住んでいる同級生の双子と一緒に公園で遊んだこと(小学生)	負けず嫌いな小さい頃から遊びでも負けたら機嫌が悪くなっていた。	小学生の時に勝つことの楽しさや、チームプレイの楽しさを教わった。	いつも、2人一緒に応援してくれていた。	B1が考えていた学校をB2が真似した。2人でチームのプレイスタイルを研究して、入学したいと思った。	中2でB2だけ代表に選ばれて、父と応援に行ったときは悔しかった。2人で一緒にやっていたら、日本代表にはなれなかった。	親は一緒に喜ぶと思った。	新しい環境では、いつもB2が頼り。この先もそうだと思う。
B2	近所の同級生の双子とふざけ合いながら下校したこと(中学生)	今でもよく会って話さずにはいられない。	今頃、試合では負けなして、楽しさを感じた。		2人と一緒にやっていたら、日本代表には入れなくて、そこそこの選手で終わっていたんじゃないかと思う。	誘われた。複数の企業で2人で見学して決めた。	この先も、できれば2人で続けたい。	

によって、その後への影響が異なるものと思われた。つまり、同様の自伝的記憶内容であっても、その意味づけの違いは後年の競技活動の取り組みにおける差異を生み出すことにつながるものが考えられた。さらに、双生児アスリートのきょうだい間で展開される関係は、アスリートにとっての重要な他者となる指導者にとって、選手との望ましい関係を考える上でのロールモデルとなるのではないかと考えた。なお、本研究においては、自伝的記憶の内化、自己展開、連続性について、直接迫ることができなかった。今後は、さらにこれらを反映した研究方法(ナラティブアプローチ、面接内容)の工夫を通して検証していくこととなる。

## 2) 集団による質問紙調査

運動有能感尺度の得点(全体:  $M=38.2, SD=9.7$ )における得点平均値からの隔たり( $\pm 1.5SD$ )を手がかりに、運動有能感高群 21 名(以下、有能感高群:  $M=54.6, SD=2.4$ 、このうちスポーツ系部活動参加者 19 名)と運動有能感低群 23 名(以下、有能感低群:  $M=20.7, SD=2.55$ 、このうちスポーツ系部活動参加者 1 名)を抽出し、彼らの自伝的記憶を両群間で比較検討した。すると、その結果は総じて

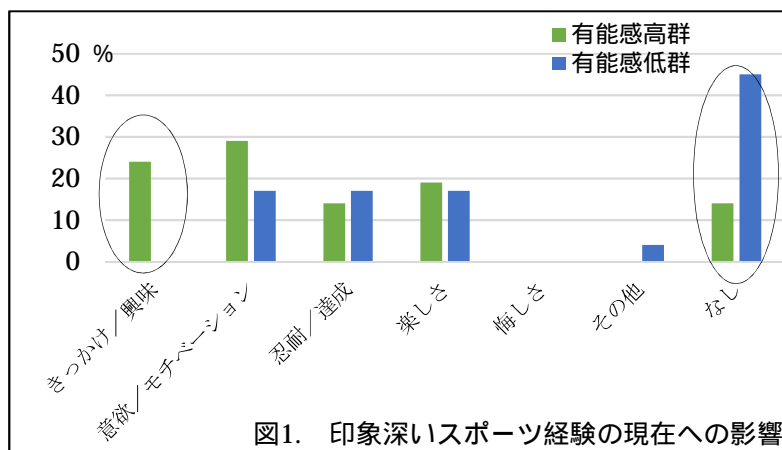


図1. 印象深いスポーツ経験の現在への影響

本研究者らがこれまで発表してきた「学生アスリートと非アスリートの比較」(奥田・中込 2016)や、「スポーツに対する態度との関係」(奥田・中込 2017)における検討結果とほぼ同様の傾向が認められ、発達年代に差異があっても、競技的スポーツ活動の参加者、そしてスポーツに対する積極的あるいは好意的態度を持つ者は、自伝的記憶の内容と現時点でのスポーツ活動との間わりとの間の連続性が認められた。

さらに、「原体験の自己展開性」(新保 2001)の視点からは、運動有能感の高い高校生は、原風景やスポーツ原体験といった自伝的記憶を始点として数多くのスポーツに関わる体験において運動有能感のネットワークを拡大し蓄積してきた者であると特徴づけられた。総じて、現時点での運動に対する自信(有能感)は、スポーツ原体験を始点とする「原体験の自己展開性」の程度が身体経験の連続性の有無を生み出し、それはアイデンティティの一部を構成していくものと考えられた。しかし、こうした説明には、スポーツ原体験を始点としたその後の歩みが“何とつながっているのか”や、“どのようにつながっているのか”といった“つながり方”(自己展開性)について、きめ細かく確かめていく必要があると考えられた。

## 5. 主な発表論文等

### [雑誌論文](計3件)

奥田愛子・中込四郎(2016)アスリートの自伝的記憶と競技行動における“連続性”の検討: アスリートと非アスリートの比較から. びわこ学院大学・びわこ学院大学短期大学部研究紀要, 8:101-108.

奥田愛子・中込四郎・今井義尚(2017)運動有能感の高い高校生の自伝的記憶の特徴. びわこ学院大学・びわこ学院大学短期大学部研究紀要, 9:87-94.

奥田愛子・中込四郎(2018)青年期まで共に競技継続を果たした双生児アスリートの自伝的記憶における内的体験の特徴. びわこ学院大学・びわこ学院大学短期大学部研究紀要, 41-48.

### [学会発表](計8件)

Okuda A, Nakagomi S and Suzuki M(2016)Characteristics of autobiographical memories in athletes compared non-athletes. The 21<sup>st</sup> Annual Congress of the European College of Sport Science. (ウイーン・7/6-9)

奥田愛子・中込四郎(2016)同一のキャリア経験を重ねた双生児アスリートの自伝的記憶の特徴 日本体育学会第67回大会(大阪体育大学・8/24-26)

奥田愛子・中込四郎・鈴木壯 アスリートの自伝的記憶と競技行動における“連続性”の検討 アスリートと非アスリートの比較から日本スポーツ心理学会第43回大会(北星学園大学・11/4-6)

奥田愛子・中込四郎(2016)アスリートにおける後年の歩みの異同と自伝的記憶~一卵性双生児アスリートの事例から~ 日本臨床心理身体運動学会第19回大会(筑波大学・12/10-11)

Okuda A, Nakagomi S(2017) The relationship between attitudes toward sport and the characteristics of autobiographical memories in high school students.



ISSP14th World Congress. (セビリア7/10-14)  
奥田愛子・中込四郎(2017)運動有能感の高い高校生の自伝的記憶の特徴.日本スポーツ心理学学会第44回大会(大阪商業大学11/24-26)  
Okuda A and Nakagomi S (2018)Characteristics of twin athletes' internal experiences based on autobiographical memories. 23rd Annual Congress of the European College of Sport Science.  
奥田愛子・中込四郎(2018)青年期後期まで共に競技継続を果たした双生児アスリートの自伝的記憶における内的体験の特徴.日本体育学会第69回大会(徳島大学・8/24-26)

[図書](計2件)

奥田愛子・中込四郎(2016)運動遊びと情動体験.西野仁雄・中込四郎(編)情動学シリーズ5 情動と運動 - スポーツとところ -.朝倉書店,pp.56-72.  
奥田愛子(2018)幼児教育の現場に活かされるスポーツ心理学. 中込四郎(編著)シリーズ心理学と仕事 13 スポーツ心理学,北大路書房 pp.127-413.

6. 研究組織

(1)研究分担者

(2)研究協力者

研究協力者氏名：中込四郎

ローマ字氏名：Nakagomi Shiro

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。